



映像化作品を見て作家と出あう楽しさ

私は就職してからほとんどテレビを見なくなったのだが、気になるドラマだけは録画して見ている。脚本家で見たいドラマを選んでいたこともあったのだけれど、ここ数年の映画やドラマはマンガを原作としたものばかりになったような気がして脚本家への関心はすっかり薄まってしまった。今は好きな役者、例えば上川隆也や天海祐希、安達祐実などが出演していれば、内容が微妙でも演技が見たいからできるだけ見るようにしているけれど、ストーリーもキャラクターも確立されたマンガを原作とするなら実写ではなくアニメで放映すればいいのと思ってしまう。



『遺譜 浅見光彦最後の事件 上』
内田康夫 KADOKAWA / 角川文庫

しかしマンガではなく小説を原作とした映像化作品はずっと昔からあって、現代でも連綿と続いている（そして見ている）。サスペンスやミステリドラマは特に顕著で、原作者がすでに故人であるが内田康夫の浅見光彦シリーズ、山村美紗の赤い霊柩車シリーズ、西村京太郎の十津川警部シリーズ、森村誠一の終着駅シリーズは長く放映されていた。横溝正史もそうだ。探偵・金田一耕助を主人公にしたシリーズは役者を替え何度も映像化されるほど愛されている。

そんな大衆受けしやすいドラマとは一線を画し、映像化作品の中でも重厚な人間ドラマを描く小説家として今回取り上げたいのが山崎豊子である。

山崎豊子の代表作と言えば『白い巨塔』（楠元所蔵：080/11 全5巻）だろうか。タイトルだけなら知っている、という人も多いに違いない。巨大な大学病院で繰り広げられる権力争いと足の引っ張り合い、1人の外科医を中心に配偶者や家族をも巻き込んで人生の全てを掛けた謀略の果てを描き切った、時代を超え役者を替え何度もドラマ化されている作品だ。ほかにも、まるで実在する男の波乱万丈な人生を細かく記録して物語に仕立てたような作品が山崎豊子には多くある。『不毛地帯』（楠元所蔵：080/11 全5巻）はシベリア抑留者だった過去を持つ男の一代記だし『沈まぬ太陽』（名公所蔵：081/070/や5-26～30）では巨大な航空会社の、政界とも癒着した利権と不正に塗れた深い闇と闘う男を描いている。『華麗なる一族』（楠元所蔵：080/11 全3巻）では都市銀行の頭取が家長として君臨する一族の愛憎渦巻く疑心と嫉妬を軸に、銀行と企業、それぞれの立場で上に立つ者の葛藤と苦悩をも描き切っている。

そして私が山崎豊子を知るきっかけとなった『大地の子』（楠元所蔵：913/20/1～4）は文化大革命が起こった1960年代から80年代を舞台に、満州で残留孤児として育った青年の来し方と、自らのアイデンティティ、国とは故郷とは、家族とは何かを問いながら日中共同事業を成功させるに至る物語だ。このドラマ『大地の子』で主役の陸一心を演じたのが、当時テレビではほぼ無名だった上川隆也である。つまり上川隆也が好きだから『大地の子』を見ようと思ったわけだが、そのおかげで山崎豊子という作家と出あうことができた。山崎豊子作品は「描き切った」と評するに相応しく、もちろん大団円で幕を閉じるものばかりではないけれど、一つの物語を完全に読み切った、という満足感を得てページを閉じることができる。ミステリばかりに傾倒していた私の読書の幅も広がったように思う。

一つ余談を付け加えると、山崎豊子は『大地の子』の主人公の配役にずっと不満があったらしい。上川隆也ファンとしては「そりゃないよ、豊子～」と思ったが、そんな不満を堂々と表明できる山崎豊子は流石だな、とも思うのだ。